

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.150

多摩風土記（大丸城）
稲城市にあり「おおまるじょう」と読む。東京都教育委員会編『東京都の中世城館』は、「眼下には、多摩川を渡る『是政の関』があったとされ、本城が多摩川の渡河地点の監視・押さえの機能をもっていた」とし、出土陶磁器から、築城は十五世紀初頭から前半を中心とした年代が考えられるとする。城址は消滅したが、近くに城山公園がある。（健介）

新会長挨拶

今こそシニアの力の結集を！



水野 星闇

この度、東京多摩地区現代俳句協会の会長をお引き受けすることとなりました。思い返しますと、平成21年に現代俳句協会員となり、当時の規約により自動的に多摩地区の会員として登録されたのですが、同時に多摩地区の会計を担当することとなりました。その時、地区会長であった柏田浪雅氏が云われたのは、地区会長とは謂わば小学校の小使いさん（用務員）のようなものだというものであります。柏田さんは、おそらく、会

長の仕事は、会員諸氏が俳句を作り楽しむことに全精力を発揮できるよう、陰に日向に黒子のように汗をかく立場であるということ強調したかったのではないかと思います。

【現代俳句協会とはどのような組織なのか】

まずは、やや堅苦しい話から書きます。現代俳句協会は昨年四月から一般社団法人に衣替えしました。それまでは、任意団体（法人格の無い社団）であった訳ですが、昭和22年に設立された我が国最古の俳句の協会団体ですので、何と七十年以上も任意団体のままだったこととなります。その長い歴史もさることながら、会員数でも我が国最大規模クラスの任意団体でした。任意団体と云うのは、謂わば仲良しクラブであります。何故に法人化する必要があったのか、会員の皆さんの認識が未だ統一されていないようですので、この点から記します。

【法人化の必要性は何だったのか】

何回か協会発行の会員誌『現代俳句』にも掲載されましたが、法人化の大きな目的は、次の通りです。

①資産の保全 従前は、協会事務所の借家契約をはじめ重要な契約、銀行預金、知的財産などは全て特定の会員の個人名義で行なわれていました。これを全て協会名義に変更。

②社会的信用の担保 俳壇内外からの信用力の向上。

③活動の活性化 新たな事業への取り組みと財政基盤の安定化。会費収入以外の事業収益の強化を図る。

【法人化で変わったもの、変わらなかったものは何か】

そもそも、各地の地区協会の前身は、各地の会員が独自に作った地区協議会のようなものでした。それを金子兜太会長時代にあって、「○○地区(県)現代俳句協会」と名乗っても良いというお触れを出した頃から、いつの間にか協会本部が上部機関で、地区協会が下部機構のような様相を呈するようになり、一体的な組織運営を志向し、その為の各種規約が作られるようになってしまいました。今回の法人化で、この点にメスを入れ、次のような覚書を選び、地区協会の独立性を担保しました。

①社団法人現代俳句協会と各地区協会は、共に現代俳句の振興の為に協力・連携する。地区協会の名称に「現代俳句協会」の名を冠することに、社団法人は同意する。

②社団法人の設立後は、新たな社団法人の会員(社員)が、自動的に地区協会の会員となることはない。地区は独自の勧誘活動を行い、地区の会員名簿を的確に整備する。

③地区協会が、独自方針に基づき地区協会のみ所属する独自の会員を勧誘することに、社団法人は同意する。

(多摩の「一般会員」の例など、各地区にあります。)

④従来の「地区助成金」は、その趣旨は踏襲するものの、助成金の要求については、地区協会はその名簿に基づき、自らの活動実績を踏まえて社団法人に請求する。

今後は、より独立性の高い、地区独自の活動方針に基づき、協会本部と連携の上、事業運営に取り込むことが求められます。

【今後、多摩地区としての目標、問題意識について】

この機会に、皆さんに提案したいことは次の通りです。

①地区独自の活動方針をしっかりと確立し、楽しい地区活動を展開しましょう。

前項に述べましたように、文化団体としての社団法人現代俳句協会と各地区協会(現在数42団体)は、組織上は別個の団体です。現代俳句協会が、それぞれの地区で地区協会員として活動することには、最大限の自立自治が担保されています。

②俳句自由の旗のもと、個々人の作風を尊重し、活発な創作活動を展開しましょう。

戦後間もない時期に僅か38人の原始会員でスタートした現代俳句協会の最重要方針は、俳句自由です。

俳句の表現形式(仮名遣い、有季・無季、単行・多行、ルビの使用、等々)は、全て作家個人の責任に於いてなされるべきことを、設立時の趣意書に謳っています。

協会のホームページの画面にも金子兜太氏の筆跡で「俳諧(俳句)自由」を掲げています。

③シニアの力を結集し、大いに俳句を楽しみましょう。現代俳句協会員の平均年齢は75歳を超えています。

社会全体が高齢化している状況であるからこそ、俳句に主体的に取り組まんとする私達は、今まで培って来た知識や経験を生かして、より良く生き抜く為の創作活動に注力し、地区活動を大いに盛り上げましょう。

皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

退任の挨拶

吉村春風子

今年三月二十三日に開催されました東京多摩地区現代俳句協会の総会をもって、会長の任を辞することになりました。会長役目を六年間務めさせていただきましたが、そのうち四年間はコロナ禍の中でありました。

思い返せば、私が当会に入会したのは二〇〇七年のことであり、今日まで十七年間に在籍させていただいております。この間入会三年目に故柏田浪雅会長の下で事業部長を仰せつかり、九年間担当させていただきました。主たる任務は春秋年二回の吟行会、俳句大会の計画実施などでした。そのうち特に印象に残っているのは、創立三十周年の記念行事として高尾山の宿坊で行った「精進料理を食べながらの吟行会」です。

その他の吟行地としては、石神井公園、殿ヶ谷戸庭園、府中市郷土の森公園、昭和記念公園、武蔵国分寺公園、大國魂神社、御岳溪谷、神代植物公園、高幡不動尊金剛寺、国立の大学通りと一橋大学、遺跡庭園縄文の村などがあります。

その他では山崎せつ子さんのお世話で毎年行った、幹事の研修旅行などがあります。研修内容としては、出発当日及び翌日

の二日間にわたって吟行句会を開催。和気あいあいの中にも、厳しい批評を行い、お互いの懇親を図りながらも作句や選句に関する研鑽を積むことが出来たと思います。更には「合同句集・第6集」の発行などがあります。

その後、柏田会長の後任としてその任を仰せ付き、不束ながらお引受けさせていただきました。

この間の行事などを振り返ると、四半期毎に発行した会報「多摩のあけぼの」の内容の充実であり、その内でも特に有難かったことは、会員の皆様の参加が毎号百五十〜百六十名と多く、約六割の方にご参加いただいたことです。順調な発行は永井編集長とスタッフの皆さんのご努力のお陰であります。更には毎月の俳句研究会や春秋の吟行会においても、幹事の皆さんはじめ、会員の方々のご協力をいただきましたことに感謝の意とお礼を申し上げます。その他では「合同句集・第7集」の発行、「第八回東京多摩地区現代俳句協会賞」の作品募集と選定・表彰をさせていただきました。

吟行地としては前記の他に江戸東京たてもの園、滄浪泉園とはけの道等があります。これらの吟行会時に私自身が詠んだ句の内から、自句を紹介させていただくことをお許し下さい。

殿ヶ谷戸庭園 平成24年11月24日

雪吊りの百弦の張り凜として

武蔵国分寺公園 平成30年11月17日

落葉とてまだある余力日を弾く

あけぼの集

クイーンのロツク響きて年越せり八王子青木 隆
 その先はなくとも花の筏ゆく八王子赤野 四羽
 素つぴんの木肌つややか寒日和国分寺秋山ふみ子
 春風やチェロ弾き午後の音合せ多 摩 足立喜美子
 掛蓬菜世塵を払ひはね返る小 平安達 昌代
 仕舞い雪ひとひら二ひら惜しみけり清 瀬 穴原 達治
 淋しさに大小なくて冬ざくら稲 城 新井 温子
 花衣掛けし棺を送りけり八王子荒川勢津子
 春の雪乗換え急きし友まりよ町 田 有坂 花野
 崩壊の能登に幾夜の虎落笛 江 有原 雅香
 避難所に届く給水水温む国分寺安西 篤
 極楽は知らねど今日の餅ふくれ足 立 飯田 和子
 お客さん終点ですようららなり東久留米 飯田 玉記
 俳句こそ長寿の杖や実千両多 摩 石川 春兔
 七寒四温大波小波あるがまま小 平 石橋いろり
 先見えぬこの世の出口春夕焼練 馬 石原 俊彦
 小一の春に習った んと まる。八王子市川 春蘭

七歳の口調大人び進級す青 梅一ノ瀬順子
 歯並びのたつぷりありて青菜飯 江 伊東 類
 喇叭水仙壺に海軍カレーの日町 田 稲吉 豊
 多賀城や碑のみ残せる養花天町 田 今田 述
 春塵舞う唐人お吉の小さき墓京 都 岩佐ひすい
 マドンナに翼を見た日風かおる武蔵野内田 牧人
 こころざしはひとりひとりに猫柳武蔵野 江中 真弓
 この国をめぐる花かな尽きたる山河府 中大井 恒行
 心臓を寄せ合つてゐる子猫かな府 中大石 雄鬼
 四股を踏む大学入試発表日日 野 大槻 正茂
 ヘソ天で寝落ちのねこや暖かし八王子大谷みどり
 河馬の背をゆつくり越えていく晩春川 崎 大西 恵
 箱売りの苺積み込む道の駅三 鷹 大森 敦夫
 ミサイル 地震ない桜前線異状あり昭 鳥 岡崎たかね
 春一番閑帝廟を踏み外す三 鷹 小川 葉子
 枯草を除きし跡にすみれ草飯 塚 奥野 亜美
 春疾風空一杯に響む夜川 崎 尾崎 太郎

あけぼの集

病み上がり夫に肩借る空うらら昭 鳥尾関 英正
 ひとり住む母の元氣や福寿草青 梅小野こうふう
 乗り換への駅ひた走る二月尽立 川片倉みちこ
 三寒や返信を待つ日のそぞろ日 野亀津ひのとり
 白梅や遙かな風を聴いている西東京河 順子
 僕は漢字の海に消えそう元日地震立 川川島 一夫
 祈りは深く永し無季を耕す大 田川名つぎお
 手当て効き河津ざくらの花万染調 布菅 さだを
 木の芽山娘と登る嫁ぐ前清 瀬神崎 幸子
 丸三角四角に老いて春惜しむ小 平城内 明子
 猫柳少女は殻を脱ぎ捨ててる府 中久保田和代
 子供部屋に鶯笛色褪せて大 田小泉満知子
 待春の間取り図に書く家具配置三 鷹高坂 栄子
 風光る左廻りの競馬場西東京幸村 睦子
 あなた似の白ふくろうとみつめあう府 中小林 育子
 風光る工事現場のベトナム語町 田小山 健介
 原発銀座地下構造のよくもまあ立 川今野 修三

春は待つものメ切は迫るもの多 摩齊田 仁
 エスカレーターすれ違ふごと去年今年昭 鳥坂本 空
 ひと言の重さに耐えている寒さ 東久留米 佐々木克子
 死とは眠りの覚めぬこと寒牡丹府 中笹木 弘
 光る背を追へば父似や初大師府 中佐藤 栄子
 ぼたん雪止みたる闇の甘やかに調 布佐藤 茉
 花こぶし怪獣めきしクレイン車昭 鳥佐藤 光子
 陽に向かい十二単のごとく生き八王子柴 れいこ
 いかのぼり何度も風に生かされて杉 並島 彩可
 湯豆腐の煮えばな食し一家言足 利清水 弘一
 華やかに翳る赤絵や河豚の皿世田谷鈴木 浮葉
 たとう紙に包んで久し春着出す立 川鈴木かずえ
 友が来たミモザミモザの春が来た小 平鈴木 寿江
 二ん月の川床の石すみれいろ小金井鈴木 佑子
 名門の医院閉づ春迷い月町 田栖村 舞
 衿をぬく舞妓のうなじ冬の月板 橋諏訪部典子
 一本なれど明かりを灯す水仙花小 平関 梓

あけぼの集

ため息に抑揚のありライラック調 布芹沢 愛子
 弾む指先ろう者二人や初桜小 平高瀬多佳子
 初空のとほく故郷の大地震 西東京 高原 桐
 保谷田無清瀬武蔵野梅月夜清 瀬谷村 鯛夢
 違和感にやがて馴染んで鳥帰る 国分寺 玉井 豊
 南高梅百年前誕生滴る味稲 城 玉木 康博
 補聴器を清めて着けて初句会日 野 玉木 祐
 甘酒の香りも仄か梅の里三 鷹 田山 光起
 アネモネや青一色のピカンの絵 武蔵野 津久井紀代
 ずかずかと来て寒鴉ずかずかと八王子 辻 升人
 春北風小学生は半ズボン 八王子 都筑 遊
 袖口で目を拭くごととき春の暮立 川 遠山 陽子
 朝市のきれいに洗う春野菜 西東京 戸川 晟
 凧高く少年に新しい自信杉 並飛永百合子
 春愁を吸い取る青い空があり清 瀬 永井 潮
 風船とわたしをつなぐ細き糸立 川 中條 啓子
 啓蟄やうつつかりミスの増ゆる日々 西東京 中田とも子
 これやこの仔猫の三毛の匙加減 府 中 中矢 温

折り鶴に脚ほしき日の深雪晴国 立中野 淑子
 思いきり伸ばす背筋やあたたかし座 間長野 保代
 胎蔵の遺跡幾 千山笑 武蔵野 夏目 重美
 春寒や崩れしままの能登棚田町 田成戸 寿彦
 うかうかと古希のうのうとお元日 国分寺 南行ひかる
 花の渦乗せて白川阿闍梨橋 西東京 西川 五月
 春空へ枝打つ庭師の命綱 世田谷 西前 千恵
 沢庵のやや枯れていて所沢昭 島 西村 智治
 春の曙夢と分かったから目を覚ます 三 鷹 拔山 裕子
 下萌や古墳群を目覚めさす 三 鷹 根岸 敏三
 一雨のきて冬草の匂ひ立つ 三 鷹 根岸 操
 寒鰯を運ぶ朝日の地は割れて小 平野口 佐稔
 道場へ持ち帰りたき落し角羽 村野島 正則
 老斑をみせ片栗の胸反らす青 梅萩原 芙沙
 あやめ咲く百済観音立ち姿 武蔵野 蓮見 順子
 極楽はいつでも楽と四月馬鹿 武蔵野 蓮見 徳郎
 ものの芽のひそかに明日へ色深む 多 摩 平山 道子
 冴え返る地政学には縛られぬ 八王子 広井 和之

あけぼの集

秘湯なほしづりの音の日永かな練 馬淵田 芥門
 普段着が似合う夕日の葱坊主国 立前田 弘
 故郷は言葉少なに日脚伸ぶ国 立前田 光枝
 幼稚園年少組はたんぽぽば八王子松元 峯子
 まぶしいな君が幽体離脱して 東久留米 三池 泉
 春寒に細いヒールに細い脚 東久留米 三池しみず
 霜枯れの紫陽花の葉が風に鳴る 東久留米 三浦 禎三
 こだはりの一語に泥むおぼろ月小金井三浦 土火
 一軒のために橋あり冬銀河世田谷三浦 文子
 一月の夜明けの満月前頭葉町 田三木 冬子
 日に一度鉢の向き変へフリージア 国分寺 水落 清子
 D51のドラフト音に春闌けぬ三 鷹水野 星闇
 妻の忌や連山春の光浴ぶ日 野満田 光生
 足首でわかる距離感夏蓬昭 島宮腰 秀子
 言い訳その1その2その3春炬燵調 布宮崎 斗士
 煮凝の舌に溶けたり妻の留守 国分寺 武藤 幹
 山椿登山かなわぬ身となりて小金井村井 一枝
 断層のなき地なき国亀鳴けり熱 海望月 哲土

農に生き青麦匂う背筋あり東村山森本由美子
 まんざくに空のほつれ目しずかなり三 鷹守谷 茂泰
 「没ぼついちばついち」の女人寒紅を一息に府 中山川 桂子
 風すこし梅の香りのする方へ町 田山崎せつ子
 花に埋もれみるみる蜂の老衰す東村山山崎美紗緒
 蜜柑むく房は昭和の大家族府 中山本 徳子
 春節や銀座通りに異国の香八王子山本ひまわり
 麦踏みの方葉の里田夕日影多 摩山本みつし
 残雪の嶺輝ける奥穂高調 布豊 宣光
 新宿の深夜を走る春の猫稲 城好井 由江
 掌に受ける刹那の形春の雪三 鷹吉川 真実
 見残せし八十路の果ての蜃気楼府 中吉澤 利枝
 被災地の蛇口の水に春の音 東久留米 吉平たもつ
 紅梅の花の数だけ日の温み国 立吉村春風子
 冬ざれや大地が息し震はせり町 田米倉 信山
 弟も寡夫となりけり蜆汁立 川米澤 久子
 春禽の関関として雨あがる小 平我妻 民雄
 また一つ廃校が増え竹の秋青 梅渡部 洋一

青木 一郎

指先に新米を炊く水加減

大谷みどり

まず「指先」に目が行かされた。何だろうと思つた。農家の人によつて手塩にかけて育てられた新米が、無事収穫された。普段と違う新米は水分が多い。炊飯器の水加減を少なめにしようとの考えが心に走つたのだらうか。情景が眼に浮かぶようだ。

青木 隆

衣擦れの音折りたたみ納棺す

森本由美子

肉親であろうか。友人であろうか。親しかった人の別れに際し思いにふける作者。衣ずれの音が、記憶に残る服を棺に納める時に改めて悲しみにくれる心情がよく表れている。

秋山ふみ子

一輪は刃のごとし水仙花

平山 道子

水仙と言えば、爪木崎の野水仙を思い出しますが、私は活けてある水仙を想像しました。水仙は香りと共に気品と気高さを感じさせます。「刃のごとし」の表現が一輪の孤高を際立たせる様に思いました。心に残る一句となりました。

安達 昌代

ふくろふのふくらみきつて夜を待つ

江中 真弓

夜の森を統べる賢者は、日中英気を養うことに懇ろである。夜の帳が下りたなら、大きな眼と翼を全開にして最も高き梢に陣取るのである。鼻を中心に、星々は天空に軌跡を描き、森では動物たちと魑魅魍魎が蠢き始める。

安西 篤

縁側に他所の猫居る文化の日

荒川勢津子

小春日の縁側に、近所の黒猫がやってくる。二年前に亡くなった我が家の猫の友で、今も時々来ては、しばらく寝そべっていく。おそらく、相変わらず奴は居ねえなあと思いつつ、うつらうつらと舟を漕いでいる。これも文化の日の功德と言ふべきか。

石橋いろり

慎重に上書保存十二月

関 梓

データ入力する際とても神経を払うのが上書き保存だ。うっかり、上書きをしてしまえばデータを消してしまうことは多々ある。作者は昨年まで、編集部で本誌の校正に尽力して下さっていた方。そのご苦労が沁みてくる。季語の十二月が校了感を増幅。

石原 俊彦

石段の残り見上ぐる七五三

稲吉 豊

子供の七五三に付き合ってくれと言われ、嬉しき半分億劫半分で出かけてみたが、神社の長い石段を先に駆け上がりて行く孫を横目に見つつ途中の踊り場でひと休みし、あとどのくらいかと見上げながら、自分の衰えと先行きを感じている様子が伺える。

大西 恵

夜食粥モネの日の出のごとく黄身

安達 昌代

夜食のお粥に落とした卵の黄身を見て、クロード・モネの作品「印象・日の出」を思い出すとは！とても鮮やかなオレンジ色の黄身だったのですね。美味しそうです。卵から絵画への発想がユニークでした。

小川 葉子

三島由紀夫の果てし市ヶ谷落葉風

足立喜美子

市ヶ谷にカラカラ落葉が走っている。三島由紀夫の自決。授業が終わると、目の前の本館を見上げた。バルコニーの上に青空が広がり、自衛隊市ヶ谷駐屯地に重なった。大学の建物は新しくなったが、煉瓦造りの本館はあの日のままの外観を保っている。

尾関 英正

痛みとは生きてる証年用意

鈴木 寿江

年の暮痛みを押して新年の支度をする作者の感慨と達観が感じられる一句。無理せず済む事もしなければ気が済まない。そんな中、体の痛みを「生きてる証」と受け止め、大局化していく。季語も効き、年神様を迎える昭和の気骨を垣間見る思いです。

河 順子

わが影とゆきあう夕焼け跨線橋

蓮見 徳郎

作者は電車の好きな昭和世代であろう。跨線橋からは三鷹電車がよく見える。上り下り何輛もの電車が、音を立て走って行く。こんな光景を楽しんだ跨線橋は間もなく撤去される。ある夕方、作者の影を、この橋に交わせて思い出した。

川島 一夫

レンタルのお店で終わった七五三

前田 光枝

読者の考える力を誘った表現に共鳴しました。七五三は神社を想像させることは誰でもできますが、レンタルのお店で終わったはそう容易いことではありません。何のレンタルなのだろうと考えさせ、それから様様なことを想像させるでしょう。

川名つぎお

シナリオを捨てていよいよ冬の蝶

宮崎 斗士

シナリオの想定しうる生き方には越冬への方位も。が捨てていよいよの副詞を選ぶ時、凍結してしまふ自由も入れた読みもあつた。句を構成する芯の強弱さがしたたかにしなう。心地よい決意が伝わって自ず「冬の蝶」に粘れ、と祈りも深まってゆく。

幸村 睦子

わが影とゆきあう夕焼け跨線橋

蓮見 徳郎

跨線橋。これは大宰も愛したという三鷹にある古い橋。解体されるというので私も行ってきました。夕焼けとわが影がゆきあう～なんて、なんともロマンチックで私の跨線橋の句がつまりなくなりました。もう解体されてしまったかしら。

小林 育子

満目のすすき満腔なる愁思

重 振華

あふれるほどのすすき原に立つたときに、全身が愁思に包まれるようだ。身の内から湧き出る荒涼感が伝わってきた。満目、満腔という言葉は耳慣れないが、満ち足りた様子をも表す「満」の字が繰り返されたことで、逆に空虚感が際立つ印象深い句。

斉田 仁

幾秋や一汁一菜多摩に老ゆ

山本みつし

多摩の語源は、①多摩川の上流の「丹波川」②峠を意味する「タワ」③「タマリ」などいろいろあり、延喜式にも登場する古い呼び名。堅実にそして謙虚に、その地に生きてきた心意気が、「一汁一菜」で言い尽くされている。

坂本 空

人体は水面でありぬ星月夜

守谷 茂泰

詩的断定というのだろうか。星空と水面の景に、体重の半分以上は水分であるといわれている人体が混然一体となるような、人類の起源、生命の起源に迫るような境地を感じさせる。星月夜と地球、そしてひとつの宇宙としての人体との共鳴。

佐々木克子

ものがみなまあるくかわき小春の日

水落 清子

季語の中で一番好きな「小春」晩秋のおだやかに晴れた日、ふと見渡すと身の回りの物が乾いている。カラカラにでなく「まあるくかわき」と表現したのがこの作者らしい。やさしさといとおしさが込められていてとても好きな、うれしい一句でした。

里祭り文久二年の大轍

笹木 弘

尾崎 太郎

春祭が農事の始まりに豊作を祈るのに対し、秋祭は収穫後に、神に感謝し、山に帰るのを送る里祭が主である。徳川家茂十四代將軍当時に大轍が作られたのだろう。コロナ明けで、久しぶりに里祭が行われた喜びが「文久二年の大轍」から伝わってくる。

清水 弘一

尽きるまで己を尽くす冬紅葉

戸川 晟

千利休の利休百首・西郷隆盛の南洲翁遺訓・新渡戸稲造の武士道・島津斉彬の座右の銘「思無邪一思い邪無し」など、日本人の精神的支柱の多くの方々の生き方と重なりました。四季折々の紅葉を見るたびに己の生き方を見つめ直し度く。

鈴木 寿江

補聴器も付度も捨て冬あたたか

城内 明子

補聴器は、慣れるまでとても煩わしいものと聞いております。また付度も他人に気を使う等煩わしいものです。それらをすべて取り除いてのんびりとした暮しをしたいものです。今年の冬は温度差が烈しいですが比較的あたたかです。

鈴木 佑子

シュレッダーの底の残滓や神無月

秋山ふみ子

昨今個人情報や昔の書類等をシュレッダーにかける事が多い。そんな日常の些事に目をとめスマートに詠んでいる。シュレッダーはカタカナで軽く、画数の多い残滓に思いが残り、古語の神無月がさらに強調している。表記が効果をあげている。

諏訪部典子

立冬や正しい嘘をポケットに

有坂 花野

「正しい嘘」って、どんな嘘。一寸した嘘によって人の気持ちを和らげたり、助けたりすることがしばしばあります。そんな優しい嘘だったらポケットに入れておきたいものです。

季語「立冬」が句を引き締めています。

高瀬多佳子

黄落の道かさこそと杖の先

鈴木かずえ

「黄落」とは落葉が黄ばんでおちること。高齢化社会となり杖をよく見かける。また怪我により杖が相棒になる方も。この句の杖は高齢者だろうか。喜怒哀楽の人生を噛みしめるように「かさこそ」と杖の先で確認しながら歩く。豊かな人生を感じさせる。

田山 光起

紅葉真つ赤空気がかたくなつて来る

山崎せつ子

晩秋から冬、紅葉が色を濃くするにつれ、寒さは一段と厳しくなる。「空気がかたくなつて来る」とさらつと言いつつ切ったのが、いい（同じ作者に「時間やわらかい」があり、やや気になるが）。言葉にすると、一層文字が際立つ。口語句の秀句である。

辻 升人

宅急便義兄の形見の冬野菜

山本ひまわり

宅急便、更に現代俳句二月号で目にしたリモート、最近我々の周辺では良く耳に目にする言葉である、こんな言葉をまず自分のものとして作品にしている、義兄、墓参り、そして老いとたたかたかに人間を詠い込んでいる。多摩現俳注目の一人である。

飛永百合子

ものがみなまあるくかわき小春の日

水落 清子

過ぎし日々を思い穏やかな心で小春日に包まれている作者の姿が目につく。「まあるくかわき」に作者の強さと優しさが伝わってくる。小春の日以外、ひらがな書きも句全体を柔らかくして、読み手の側にまわす小春日の温もりが心地よく響いてくる。

永井 潮
品種改良甘し林檎とは言えず
今田 述

果物は甘みの強いもの程上等とされ品種改良が続いた。苺、蜜柑、葡萄などとてもおいしい。でも林檎はどうか。適度な酸味がないと物足りない。子供の頃、国光、紅玉を丸かじりした年代の人には、今の一部のリンゴは甘すぎて林檎とは言えないのだ。

夏目 重美
玄関の靴をそろへよ神送
根岸 操

「何かあった時すぐ逃げられるようにね」と、枕元に着替えを置いて床に就かされた子供の頭を思い出しました。「神送」は、出雲に旅発つ神々への送別の儀礼もさることながら、人々のきちんとした暮らしの中から根付いた季語なのでしょう。

成戸 寿彦
風花や渡り納めの跨線橋
幸村 睦子

この橋を愛した太宰治を思う時、ひととき華やかに舞って消えていったその生き方に、「風花」はふさわしいのだろう。しかし同時に、この橋を生活の一部として日々富士を仰ぎ見つつ渡り納めとした現代の人々にこそ、「風花」はふさわしいと思う。

南行ひかる
紅葉真つ赤空気がかたくなつて来る
山崎せつ子

「真つ赤な紅葉」の緊張感が空気にまで伝わっているのだろうか、あるいは冬が近づいてきている暗示だろうか、独特の感性と、その本意の読み解きの世界に引き込まれます。「紅葉真つ赤」の出しの言い切りと全体の口語調が新鮮です。

西前 千恵
満月を見上げ味わう平和かな
根岸 敏三

耿耿と美しい月を眺め、心からやさしく平和な気持ちがあります。今、地球でおこっている戦争、災害、暗いニュースを少しでも忘れ平和とは何と尊く大切かと思えます。一日も早く世界中の人々が仲良く暮らせたと作者のお句に大いに共感いたします。

西村 智治
無心とはただ歩くこと春の尾根
宮腰 秀子

春の尾根だから高い山ではないだろう。裏高尾とか、秩父の丸山から金昌寺への、なだらかな尾根などが思われる。あるいはもう少し低くてもよい。ほんの少しだけ芽吹きはじめた尾根筋を無心で歩く。それは寂しいのか、楽しいのか。

萩原 美沙
葉牡丹や吉凶の日々巻き込んで
松元 峯子

年末になると、お正月用の葉牡丹の寄せ植えが店頭に並びます。花農家さんの無限の努力と、私達日常の吉も凶もすべて渦の中に巻き込み、無言で輝いている葉牡丹。正に人生の教訓であり、胸を打つ一句です。

蓮見 徳郎
不得意なものに運針一葉忌
小山 健介

一葉の時代、ほころびは繕って使うのが庶民の暮らし。今は繕うより、捨てて、新しいものを買うことの方が多しかな。男がひと針ごとに針を操る侘しさ。妻あらばとふと想う時である。

淵田 芥門
晩秋や奈良の土産に筆と墨
三浦 禎三

古来、名産品の奈良墨は現代の世俗には遠いが「土産」の措辞を以て深みある句柄だ。芭蕉「菊の香や奈良には古き仏たち」蕪村「秋の燈やゆかしき奈良の道具市」に似て古きを愛で、侘しき古都の晩秋との取合せの妙が古典句への憧憬をも満たす佳句だ。

前田 光枝

ものがみなまあるくかわき小春の日

水落 清子

ひらがな表示のやさしい一句に出会い、ホッとシハツとした。「ものみな」と世に投げかけている深い思いを感じる。人の心が少しでもまあるくあれば戦などいらない。身の回りの見えるものから目をそらさない作者のやさしくもきびしい心がある。

三池 泉

芒原ワタシハドコヘイクノデセウ

斉田 仁

かつて箱根仙石原に行ったときのこと。同行の何人かと芒原へ。するとその中の一人が近くに居なくなつた。探し歩くとしばらくして、背の高い芒を分けて現われると云つた。ちょっとあの世を見て来たのよつて。芒原のこわい感じ。

三浦 禎三

印鑑に白息をかけ訂正す

永井 潮

気温と湿度によつては室内でも吐く息が白く見える。使う機会が少なくなつた印鑑だが、本人確認の有力なツール。訂正には同じ印鑑を捺す。朱肉を使わず、は！と掛けた息が白い。大きな被害を受けた震災地など、いろいろな場面が想像できる。

三浦 土火

石段の残り見上ぐる七五三

稲吉 豊

元気にかけ上る子供、それを見上げながら、ゆるゆる登るおとな達。様々な思いが錯綜する。

三浦 文子

三面鏡の一面は雪我が九十

遠山 陽子

十代の頃、雪国育ちの私は夜になると自室の窓からしんと降りつづく雪を見るのが何とも好きであつた。雪は音を吸い、あたり一面無音の世界となる。そしてしみじみとあたたかい。掲句に触れ作者の九十を想つた。

水落 清子

ふくろふのふくらみきつて夜を待つ

江中 真弓

騒音などほとんどなかつた故郷での生活を思い出させてくれた御句。夜になると寂しさと侘しさを合わせたように、ゴロスケホーホーと鳴くのです。中七で獲物を取る準備をする様子が見えます。今夜も鳴いているかしら。

宮崎 斗士

気候異変も初木枯しに安堵せり

岡崎たかね

昨年暮れから今年にかけての異様なほどの暖冬の日々。有難いと思う反面、この先地球環境はどうなっていくのかといささか不安にもなる。冷たい木枯しに吹かれつつ、しみじみと「安堵せり」。まさに今現在の地球人の心境をびたりと活写した一句。

望月 哲土

補聴器も付度も捨て冬あたたか

城内 明子

補聴器を捨て、聞こえないものは聞かなくていいと割り切り、耳に入らない話し声も何を話しているのだろうかという付度もしないことにしたのだ。聴覚からだけでなく、世の煩わしさから解放された快感が季語の「冬あたたか」からよく伝わって来る。

守谷 茂泰

死ののちの夫のむすうや大西日

三浦 文子

「夫のむすう」の解釈が難しいが、西日の中で止まき夫を回想している句であろう。夫のいない喪失感の一方、沢山の思い出の中には無数の夫が存在していて、作者を今も見守っている。そんな一抹の救いの心境を詠んだ作品と私には思われた。

山崎美紗緒

冬満月樞の君は身じろがず

辻 升人

改めて言葉とし文字として見ると、胸がしめつけられる。冬満月の歌歌とした輝きの下、長い間のつれ合いとの暮しが、スクリーン上のように駆け巡る。どんなに愛や金があるろうと、別れは誰にも訪れる。下のフレーズに全身総毛立つ思いで拝読した。

山本 徳子

師走来てまた一つ歳増えにけり

笹木 弘

ある年令になると、歳を増す事に愁いを感じる人、又喜びと感ずる人がいると聞きます。お寺の守り札は数え年で記されていますので、一つか二つ歳が増えていますね、作者の思はいかばかりでしょうか。皆も思う一句でしょう。

山本ひまわり

花木権父の終章無色なり

山崎美紗緒

木権が相応しい。夜には潤んでも朝を迎えりと次々に華やかに咲き続ける力強さ粘り強さ。波乱万丈頑固一徹の人生の最後は「無色」。お父様の生き様が伝わる。私の父の人生と重なった。次々と思いが溢れて胸が熱くなった。心から共感。

山本みつし

無心とはただ歩くこと春の尾根

宮腰 秀子

私にとって、生涯で唯一の山登りは、富士登山です。その私が、「無心」とは。春の尾根をただ歩くことという句境に、心引かれました。私にとって、「無心」に歩くことが全てという同じ体験を通して、壮快な気持を共感することが出来ました。

豊 宣光

風花や渡り納めの跨線橋

幸村 睦子

二〇二三年十二月十日は、撤去される三鷹駅跨線橋の渡り納めの日でした。作者はその日に渡ったのでしよう。太宰治が愛したこの跨線橋、私も以前、橋の上から遠く高尾・秩父山系に沈む夕日を眺めたことがあります。なつかしい思い出です。

吉川 真美

宅急便義兄の形見の冬野菜

山本ひまわり

お義兄様が亡くなられた後にお義兄様が生前丹精して作られていた冬野菜が宅急便で届いたのだらう。亡くなられる直前まで元気に畑で立ち働く姿が浮かび、急逝された悼みと偲ぶ思いが伝わることに、残されたご家族との暖かな交流が感じられる。

米澤 久子

印鑑に白息をかけ訂正す

永井 潮

「あれっ実印どこへ置いたっけ」印鑑を押すことも、まして訂正印など遠い昔嘶となりました。はあと息をかけて訂正印を押す、来し方とこれからの生き方を修正、なんて出来たら最高と作者は思ったのでしょうか、楽しい時間を頂いた一句です。

あけぼの便り

○一ノ瀬順子様、前号で拙句「緑蔭や」を鑑賞していただき有難うございました。心に沁みました。これからも励みます。

(秋山ふみ子)

○はじめに投句させていただきました。どうぞよろしく願います。(有原雅香)

○高野さんが亡くなられてから、身辺俄かに淋しくなりました。同年の遠山陽子さん、玉木祐さんを目標に頑張ります。

(安西篤)

○役員の皆様、いつもお世話になりありがとうございます。暖かくなると花粉症の身には辛い季節です。花の季節だということに……。

(一ノ瀬順子)

○揚羽蝶を「五億劫年の命」と詠んだ高野さんはもういない…。今年は私の庭にも揚羽の羽化の気配がありません。去年はアツと息をのみました。訃報は悲しい。長生きしましょう。(奥野亜美)

○初めて投句です。よろしくお願いいたします。(片倉みちこ)

○気候変動、異常気象の報が相次ぎ、日々の寒暖の差も極端になる中、付近のマンサクの花がタイムリーに咲いてくれて気が和らぎました。早春の黄の花は良いものです。(亀津ひのと)

○会報「多摩のあけぼの」が長く続いておりますのは編集者の皆様方のなみなみならぬご努力の賜物と思います。感謝申し上げます。(河 順子)

○去年、大井恒行の作品評を書いたが未だ没のまま、今回になったが都合あつての事か。宮崎作品にはそれをしないようよろしく。(川名つぎお)

※編集部注 川名さんの大井作品評は本誌147号に載っております。

○泣いてせがまれ姉妹に買った二つの鶯笛。今は二人とも立派な社会人。熱海梅園の思い出です。春が待ち遠しい今日この頃、心も体も軽くなります。(小泉満知子)

○能登の地震からあつという間に一カ月過

ぎました。二月、光の春…：ほんとうの春はいつ来るのでしょうか。私事でもつらいことのある昨年、はたして今年はと少し気弱になっている自分をしっかりとせねばと鼓舞しています。(佐々木克子)

方々を思うと胸が痛みます。都市直下型地震への備えは？と思うと心もとないです。もう一度見直さなくてはと思うこの頃です。(飛永百合子)

○三木冬子様、前号にて拙句をご鑑賞いただきありがとうございます。足の衰えを補うため毎日少しずつでも歩いています。(鈴木かずこ)

○老老介護の真つ只中です。人生修行のひとつですよ！(中田とも子)

○私事乍ら秋に軽い脳梗塞で入院、その後医療難民でうろうろ、ようやく新年と思つたら故郷能登が大地震です。幸い能登町は災の少ない方でありがたいことです。この前テレビで宇出津港の鰯漁をみて、以前『現代俳句』に載せた文を思い出しました。能登の人々に誇りを取り戻してほしいと願っています。(高原桐)

○六十七年続いた都庁俳句誌が終刊となつた。俳句会そのものは存続させようと仲間と努力しているが、その大変さを実感している。高齢化の中、貴会のご尽力に感謝申し上げます。(成戸寿彦)

○春が来たかと思つた次の日は真冬に逆もどりの雪。体もこの天気狂つて居ります。一月末に転び腰椎骨折、この齡で苦しみました。一カ月経つたのに痛みに悩まされております。「若いと思つていても骨は齢相応」と医者が言います。どうぞ皆さんお気を付けてください。(玉木祐)

○伊東様のお便り「投句などネットでの」ご意見に賛成です。編集部もメール投句になれば仕事の軽減にはなはずです。(根岸操)

○八十三才、ゴールが全く見えない。(辻升人)

○元日早々能登半島の大地震、被災者の

○元日早々能登半島の大地震、被災者の

○尾崎太郎様、根岸敏三様、前号で拙句をご鑑賞頂き有難うございました。生き甲斐を感じます。(萩原美沙)

○元日早々能登半島の大地震、被災者の

○いつもありがとうございます。確実に老

いが迫ってきています。148号から戸川さんにあたったかい評をいただきありがとうございます。どうぞございます。(前田光枝)

○玉木康博様、前号にて拙句をご鑑賞いただきありがとうございます。嬉しく励みになりました。(松元峯子)

○神崎幸子様、拙句を取り上げて頂きありがとうございます。今後の句作の励みになります。永井潮様、再入院の知らせを聞き、早い回復を待つばかりです。お大事に。(三浦禎三)

○人間の集団殺害はジェノサイド、建物を大量に兵器で破壊するのはドミサイドという。掛け替えのない地球、人類の歴史を想う時、国の有り様、人それぞれの人生を想う時、心ある人はやり場のない悲しみでいっぱいになります。(三木冬子)

○元日に能登を襲った地震、言葉を失いました。被災地の皆様の一時も早い完全復興をお祈り致します。我が家の備蓄品の賞味期限を確認しました。(水落清子)

○三月の総会で役員改選があり、幹事にも新たに三人の方が加わられます。私は複数の句会の世話役をしているので、必ずしも多摩現俳第一とはいかないながらも、手を携えてより良き多摩現俳にしていきたいと思っております。(満田光生)

○能登半島地震で明けた今年、一向に止まぬ各地での戦争。世界的な選挙イヤーの此の一年。ますます酷い世の中に為る恐れありますね!! (武藤幹)

○いつもお世話になりありがとうございます。急に暑かったり又寒くなり体にこたえる最近、ご自愛下さいませ。(村井一枝)

○有坂花野様、城内明子様、前号にて拙句をお採り上げ戴き真に有難うございました。ご鑑賞嬉しく拝読させて頂きました。(望月哲士)

○高齢も又試練です。(山崎美紗緒)

○二月は五日に雪が降り、二週間後には24度Cくらいの五月のような陽気となり、同じ週末は真冬の寒さとアップダウンの気温に身も心も右往左往しております。それでも庭には黄水仙スノーフレークが咲き出し季節は春に向かっていくことに心強い思いを持ちます。(吉川真実)

○編集の方々にはいつも感謝しています。特に元編集部の経験者としては、特に深く理解しています。ありがとうございます。(渡部洋一)

第12回 俳句研究会

12月23日(土) 立川市子ども未来センター

担当幹事 水野星間・秋山ふみ子・

玉木康博・山本ひまわり・

石原俊彦・根岸操・根岸敏三

参加者21名

★講話なし(参加者各自の近況報告と抱負)

惨状は画面の向こう毛糸編む 山本ひまわり

山茶花や硝子のやうな老いころ 秋山ふみ子

警笛を鳴らし寒夜の貨車の列 松元 峯子

病んで知る元気は宝寒椿 飯田 玉記

湯豆腐のぐらりと揺れて父のこと 吉村春風子

子どもらの夢は翔平クリスマス 青木 隆

歳を経しよき顔揃う年の暮 石原 俊彦

煮凝や打ちあける恋ひとつあり 根岸 操

菰卷きの荒縄をこ結びなり 三浦 土火

自在鉤看は熊の出た話 小山 健介

小間切れの冬至南瓜の売られけり 西前 千恵

寒波来る犬が突つ張る玄関口 戸川 晟

終末へ秒針振るるクリスマス 亀津ひのとり

狐火や常闇覆ふ永田町 稲吉 豊

燃え盛る櫓火に父祖を思ひけり 淵田 芥門

木枯しや人も葉っぱも駆けていく 尾崎 太郎

枯萩や直立不動で筋通し 根岸 敏三

崖下に焚火の煙昇平忌 満田 光生

関東はいつも快晴大寒波 大森 敦夫

しらしらと急風花のゆくへかな 水野 星間

澄み切った天空にぐくくと大銀杏 玉木 康博

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。(通見幹事担当)
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

★令和六年度定時総会 並びに陽春句会

3月23日(土)午後2時より武蔵野スイングホールで開催されました。詳細は次号でお知らせします。

★初夏の吟行会

日時 令和6年6月1日(土)
場所 正福寺と北山公園(東村山市)
(詳細は別紙をご覧ください。)

★会員の現況(3月末現在)

224名(正会員179名・一般会員45名)

☆新入会員 3名(敬称略) *印は正会員

*片倉みちこ(立川市)

*小林マリ子(あきる野市)

岩佐ひすい(京都市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(新規入会の方は申し込み手続きが必要)。
その他一般の方は年会費2千円です。
お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

満田 光生(光) 飛永百合子(百)

山崎せつ子(せ) 永井 潮(潮)

◇◇◇◇◇ 案 内 ◇◇◇◇◇ 俳句研究会

第5回 5月18日(土)午後1時

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)

電話042・529・8682

第6回 6月22日(土)午後1時

立川市子ども未来センター

第7回 7月20日(土)午後1時

立川市子ども未来センター

(いずれも会費千円、出句三句)

○俳句研究会の会費は、四月から千円になりました。

原稿送り先の変更

「一句鑑賞」原稿の送り先は今まで山崎せつ子さんでしたが、次号から新幹事の青木隆さんに変わります。本誌同封の執筆依頼書が届きましたら青木さん宛によりしくお願いします。

「あけぼの集」葉書の宛先は従来通り山崎せつ子さんです。

編集後記

☆退職して二年、幽霊会員だった通信句会に復帰、月例吟行句会にも参加。「その日暮し」の俳句から、結社誌投句後の「貯金」が漸く可能に。句歴は長いが、俳句は再スタートだ。(光)
☆元日の能登半島を襲った大地震には驚いた。東日本大震災の3・11から十三年。地震列島とも言われる日本だが、一人一人の災害に対する備えも忘れないようにしたい。(百)

☆例年三月中旬から咲き始める桜が今年は大分遅れ、下旬になっても冷たい雨。名所となっている近くの緑道もお花見とは程遠い。春を迎え又新しい気持ちで俳句に取り組みたい。(せ)
☆先の総会で吉村会長が退任し、水野星閣さんが新会長に就任された。水野さんは昨年まで協会本部の事務局長で、その前は当会の経理担当幹事だったので古巣へ戻った感じです。新役員を迎えた総会の模様は次号に掲載します。(潮)
―題字は三橋敏雄氏―

令和六年四月三十日発行

発行人 水野星閣

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-1-07

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

E-mail hitemo@ybone.jp

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 042-620-2626